

文化高知 13

昭和初期の高知の思い出

岡村 一雄

大正の終りから昭和一桁の時代に高知市で青少年時代を過ごした者としては、中規模の都市に発展した現在の高知市を見て、如何に時代の流れとは言え隔世の感がするので思い出を書いてみたいと思う。

当時、高知市は旧市と江ノ口町、潮江村、旭村、下知村、小高坂村等と行政的に区別されていて、電車がハリマヤ橋を中心に東西に走り、野村バスと明石バスが中心部を走っていた。土讃線はまだ通じておらず、四国の中の陸の孤島であった。飛行機は新聞社の水上機が一機あった。本州との唯一の交通機関は、高知港から大阪、神戸へ向けて出る船便で、千トン足らずの浦戸丸と室戸丸が毎日交替で就航していた。出航の際にはドラが鳴り、色とりどりのテープがひかれ、情緒があった。

鏡川はその名の如く清く水量も豊かで、五丁目附近から下流雑喉場橋附近までは水泳場として、夏は若者であふれた。浦戸湾も水が清く澄み、魚の宝庫として、至る所に太公望たちの釣り糸をたれる姿が見られた。法師ヶ鼻には枝ぶりのよい松が突き出っていて、五台山を背景に帆掛け舟が浮かび一幅の

絵のようであった。高知と種崎、浦戸、桂浜を結ぶ巡航船は、波静かな浦戸湾を歩きかい、瀬戸内海を思いおこさせる穏やかな風光をつくっていた。

当時はテレビはなく、ラジオが各家庭にぼつぼつ普及しようとしていた。報道も新聞が主であり、高知新聞と土陽新聞が発行されていた。娯楽は映画ぐらいで、無声(活弁付)映画全盛時



高橋鴻二

代であった。映画館は世界館、大山館、鳳館等があり、いつも大入満員の盛況であった。芝居小屋では堀詰座が最大で、時には中央で名の知られた役者が上演した。ビルとしては野村デパートと中央食堂の二軒があった。夫々にエレベーターがあり、田舎からわざわざエレベーターに乗りに来る人もあった。

学制も旧制時代で、義務教育は尋常小学校までで、その上に高等小学校があった。普通は尋常小学校から旧制中学校へ進学した。男女共学ではなく、男子生徒が女学校の運動会とかバザーを見に行ったりすると叱責を受けたり、夜は外出を禁止されるなど厳しかった。大正の終りに旧制高知高等学校が設立され、全国から沢山の学生が勉学に集まった。場所は現在の附属小中学校のある所で、周囲は全部田圃であった。学生達は自由民権思想にあこがれ、勉強もしたが、その青春を謳歌して、弊衣破帽、バンカラで、よく高知の街をストームした。時には電車を停めるような事があったも、市民も寛容で、学生にとって良き時代であった。旧制高校が出来た事によって、日本文化の最高レベルにある先生方が来られ、僻遠の地であった高知の文化の向上に多大の貢献をされたことも確かである。その卒業生は現在全国に散らばり、各界の要職に就いている。

考えてみると、昭和になってこの六〇年は未曾有の戦争をはさんで激動の時代であった。殊に戦後の四〇年の発展は目を見張るものがある。そして今、県では高知新港建設計画を進めており、高知市は昨年、健康都市宣言をした。二一世紀の高知市はどんな都市になっているのだろうか。明るい夢を託して筆をおく。(高知県医師会会長)

故里は

遠きにありて

小松 明

文画



年齢のせいかな頃は妙に土佐が恋しい。離れて二二年、ことごとく土佐が思い出される。懐しい友垣も一人減り、二人去りして淋しさは募っていく。それにしても土佐は温かい人の心の温かさ深さにはやはり土佐を離れた者にだけしかわからぬ美しさがある。自分が居た時には思いもよらなかった事が、離れて二〇年以上もたつと美しく、又、懐しく思われてくる。

日曜市で冷かし半分に値切つて買う野菜や果物、その言葉のやりとり面白いこと。

「オンチャン、このハサミは切れるかよ」

「そりゃ、アホウとハサミは使ひようによつて切れる言うきに、ちつとは切れるろうぜよ」

若い男と道具店の親父との会話であつた。実に面白い。こんな会話が随所で見受けられる。都会ではどう

てい考えられない風景だ。

去年の秋であつた。友人と浦戸大橋の下へ、チヌを釣りに行った。仕掛けが悪いのか腕が悪いのか、一匹も釣れない。二〇メートル離れた所ではボラが大喰いしている。だんだん自分もいれこんできた。すると、隣でチヌを釣っていた親父さんが、「せつかく大阪から来たがなら、わしがボラの仕掛けをこしらえてやる」とわざわざ車に乗って釣具店に行き、道具とエサを買つてきてくれ、釣り方も教えてくれて私に思う存分の釣りを楽しませてくれた。三〇センチ以上のボラを五四匹という大釣果に興奮した私は、親父さんにオカズに持つて帰つてくれと何匹かのボラを渡すと、「魚を持つて帰ると料理するのがメンドイいうて女房にツカれるきにいらん」といつて、「明日また来いや」とその魚を海に戻してやった。ああ釣道、まさに太公望であ

つた。とたんについていつも魚釣りにせかせかする自分が実にあわれでみじめであつた。恥ずかしかつた。土佐にはそうした呑気さ、美しさがあつた。それに反し、移ろいといえはそれまでだが、浦戸湾、宇佐湾、浦の内での魚の釣れなくなった事。昔はよかつた、と思う。魚もよう釣れたし、海もきれいであつた。住む人の心は移ろわぬまでも、景色は年々にさびれていく。悲しい事の一つである。

今年五月、高知大丸での個展の時にも土佐の人の人情の厚さ、美しさをいやという程味わつた。会場は連日大入り満員であつた。そして皆が皆、熱心に真面目に喰いいるように作品を見てくれた。中には涙さえ流している方もあつた。私は感動した。二〇回以上も個展の経験はあるが、こんなにも一生懸命に絵を見て下さる土佐人という者の本当の心の温かさ、美しさを、私は「感動」という言葉の中で知つた。感動が心に伝わつてきた。そして会場を去る時、「いい絵を見せてもらつて有難うございました」と丁寧な頭を下げて帰られた数々の人が、まるで仏様のようになつた。都会ではお前の絵を見てやつたぞと、そっくりかえつて帰つていく人が多い中で、土佐の人々は真向から自分を見てくれた。本当に有難かつた。感激した自分は

せめてものご恩返しにと、市役所に百号の大作一点を寄贈した。

そこで一つ思つたことは、もし此所に美術館があつたらということである。残念ながら大丸の会場は狭くて、大作の陳列には不向きであつた。せつかくの個展だから、五百号、三百号、二百号などの大作を並べたい。そして心ゆくまで小松という者の作品を見ていただきたいという事の残念さである。この土佐人の温かい心をもつともつと温かく生かして、陳列場を是非つくつてもらいたいものである。

こうして書いていくうちに、自分は土佐人であるという事の自負の大きさに今更ながら気づく。若い時は田舎者だといふ一種の引け目みたいなものを感じていたのだが、今では全く違う。土佐の美しさ、土佐人の立派さがむしろ自慢になつて、大いに肩をはって生きていける。有難いことだ。これから先、何年生きられるか知らないが、大阪という喧噪と野心の中に居て、俺は土佐人だ、なめたらいかんぜよと生きつづける自分の中で、画家という孤独の世界でたつた一本の絵筆を頼りに、いとまない作業を続けるチツポケな男の心の中を通りすぎる龍馬の精神、やつぱり私は土佐のイゴソウである。

(画家・茨木市在住)

生涯自分の歯で

小松 三朔

芸術・文化は人の活動の華として、時代の証であり、また、私たちを楽しませ活力を与えてくれるものですが、これも健康あつてのことだと思ひます。その健康は「命は食にあり」といわれるように、食べる事が基本となります。食べるには、つまり噛む、歯の丈夫さが大切です。

最近余り噛んで食べる食物がないため「噛まない子」「噛めない子」の問題が表面化しています。食事のための大切な歯は、意外に日常の健康管理が見落されているように思ひます。これは一本の歯くらいはと軽視したり、また直接生命に拘らないことであるために見過されているのではないのでしょうか。

歯の二大疾病としてムシ歯とシノウロウロウが挙げられます。ムシ歯に一旦罹ると、歯には自然治療能力がありませんので、歯医者さんで直してもらひしかありません。シノウロウロウは歯を支えている骨が次第に失われていく病気で、これも失われた骨の再生は今のところ望めないと考えた方が良いでしょう。この二つの疾病は風邪などと同じ日和

見感染で、口腔内の細菌群のバランスが崩れ、ある種類の菌が異常に増殖するために発病します。原因は口腔内の汚れで、糖分により極端に助長されます。一般に歯垢といわれるものは、食物残渣や糖分を栄養として増殖した細菌の塊です。これは細菌の出す粘着性の物質で歯の表面にかなり強固に付着していますので、うがいやつまよウジなどでは取り除くことができません。歯ブラシで機械的に除去するしか方法がありません。

そこで毎日の歯磨きが、最良の健康管理であり、治療にもつながり、ムシ歯の進行や骨の吸収を減少乃至ストップさせる効果があります。しかし、この時歯磨剤を使用しますと歯を摩擦させるばかりでなく、一分も経過しないうちに口の中が爽かになり(テレビのコマーシャル・イメージがこれに重なります)、磨けていないのに磨けた感じになりますので、歯磨剤を使わずに十分くらは時間をかけて歯を一本ずつ(二八本から三二本あります)、丁寧に磨くことが望ましいのです。一日一回は充分時間を掛けて、テレビを見ている時、新聞を読む時、入浴の時など、それぞれ工夫して口腔の健康管理と増進に時間をさいして下さい。また、磨いているのと磨けていないこととは違いますので、歯の定期検診と

ともに、歯科衛生士に歯の磨き方を教わるようにすれば、一生自分の歯で食事が出来るようになります。歯は文化を支えています。

(歯科医)

幼い夢と

筒井 佐和子

小学校の放課後 子どもたちの本来の姿がいちばん現れるのではないか、と思われる時を、六〇人の子どもたちとともに過ごしている。私は子ども会指導員。宿題がすむと、ワツと外に飛び出していく。一本の太綱を握つて、高く積み上げられたタイヤのまわりをぐるぐるスピードを上げて回っている男の子は宿題をしていない。「眠くなるから、宿題はしておこうね」。

サッカーや遊具、砂場、トンネルなどで一心に遊ぶ子どもたちの姿を見ると、時代や環境の変化とは何だろうか、「現在」は何を子どもたちに求めているのだろうか、と考え、一瞬気がひき止まる。

(遊べる時間は、この放課後の一時間と、家の付近の夕食までの短い時間。そして、教えることがいっぱい

あつて、待つている私たち)。

素直に子どもを思い、髪に陽のにおいを感じる時、とても真剣な遊びの世界と、三〇代の心を交換するようになった時から、たがいの奥にひそむ芽や力を私は意識し、「現在」に対して不安や迷いがでてくる。いじめの問題や言葉の暴力の問題、学力の問題など、子どもをとりまく状況は暗くせつない。物質的な豊かさや科学技術の進歩発展の一方で、世界には飢え苦しんでいる子どもたちがたくさんいる。

現代は、ほんとうに暗いのだろうか。そう感じる時、私たちは一人一人の方法を考え、すくなくとも利己的になつてはならない。

或る日、一年生の女の子がブランコで面白いことを発見した。私も同じように体をそらしてブランコにのり、いっしょに空を見あげた。緊張する青さだ。覚えておきたいイメージが一つ一つ息つき積み重なつていく。

うない児がすさみに鳴らす麦笛のこえにおどろく夏の昼臥

(西行詠)

日々、幼い子どもたちとくらししていると、何もしてない時でも、罪障感が深まってくる。

(泉野小学校子ども会指導員)

ムクムク

梅原 真

「地方の時代」という評論（高知新聞学芸欄）を読んで、私は「やつたあ」と思った。大阪から帰ってきて「この高知で何ができるのやろ」と考えていた時、「これからは地方の時代だ」というのだから喜んでしまったのだった。私はその日から急に偉い人間になった。都会の人間は可哀そうやなあ、これからは地方の時代やで、地方の……。大阪や東京に住んでいてはええもんできんよー。それからというもの他人事（ひとごと）のようにひたすら「地方の時代」のやってくるのを待った。それは鼻歌まじりでもあった。「まだかな、まだかな、チホーの時代つと」。あれからかれこれ十二年、チートモ来んやないの「地方の時代」。

「地方の時代」という地方に住む人間をニヤッとさせるこの言葉は、地方の人間が創った言葉ではない。大都会に住むロマンスグレーの評論家のおっさんが創った言葉に違いない。大都会にいて、物にあふれ、人にあふれ、疲れ果てた文化人が、田舎の自然や、根太さや、おんちゃん

す。きちんとケジメをつけることで、はりまや橋が別のはりまや橋になってしまふのです。

○ケジメのついたはりまや橋の近くに点在するのが地方銀行のいろいろ。これらの銀行の前の掲示板に貼ってあるポスターは、ほとんどがモードイン大都会のできあいポスターです。いつもきれいなおねえさんが（時々うれい水着姿で）ポーターは○○銀行へと笑いかけてくれます。ほっかむりをした日曜日のおばちゃんが、ポーターは○○銀行へと笑いかけたらチョットキモチ悪いけど、チョットキモチいいですよ。

○その銀行あたりから少し飲み屋街へ入ると公園が様変わりしています。確かこの間まで土だったのに、レンガにしてみたり大理石みたいなのにしてみたり、チョットこざれいになってみたり。公園は子供が遊ぶところ、ブランコするところ、走り回れるところ。ゴツゴツのレンガであぶないやおまへんか。公園はヨッパライがオシッコをしに来るところではありません。公園ぐらい土にしてみませんか。雨が降って水たまりができて何故悪い、「土佐では泥んこ遊びするために公園はあるがぜよ」と、高知人なら思ってみようではありませんか。○ずーっと西へまいりまして、日本

の生き様に、いきいきとしたエネルギーを感じはじめたからに違いない。豊かさとは何なのか、五千万円のマンションか、それとも空や風や川や海、山なのか。それは都会人のコンプレックスとなり、地方からムクムクと大きな力が湧き出てくる姿を想像させたのだ。

そして一方ムクムクしなければならぬ我が高知。ちっともムクムクしている気配がない。何故ムクムクしないのか、それは、「高知に住む人間が、高知らしいものの考え方でものを創らないから」。何かものを創りあげようとする時必ずといってよいほど、東京のお手本を見てから、のぞいてから、その上安心してから創ろうとするから。そのまま拝借してくる事さえ日常茶飯事。これでは高知のムクムクではありません。東京のムクムクでんがな。かの評論家さん、東京のムクムクを地方に作られてしまふという思わぬ展開までは読めなかつたと、嘆いている姿がミエマス。

最後の清流四万十川、こちらの方の開発も進もうとしています。しかし今まで御紹介した高知人の発想なら、ヘルセンター、遊園地、大橋と開発が進んで行くのが目に見えてきます。今のままの四万十川の姿を残すための開発にお金をかけるという発想はできないものでしょうか。四万十川の景観もだいぶ変わってきました。あのコンクリートで護岸工事をしてしまふのではなく、草のはえた土手をそのまま残しながら治水ができる方法を研究する、開発する……。不便な不便な四万十川、しかしその姿は昔のまま、こんな四万十川に憧れて人はきつとやってきます。このことが「地方の時代」の意味ではなかったのか、大きな橋ができるたびに沈下橋がまた一つ少なくなりまふ。大事にせんといかんところがずれていて、結局元も子もなくしてしまふ。都会のやり方を見てきて、都会のレベルに近づくことが開発だと思いいんでいる私たち。もうそろそろ高知の高知人らしい発想をしませんか。カルチャーとは「耕す」こと。自分の畑を耕すこと。自分で耕やし続けられ、耕やし方が少しずつわかってきます。となりの畑はとなりの畑、気にはなるけど違うカボチャができてから面白い。……と思うのですけれど。

（広告業）

このままでは地方に自分でものを考える力、物を作ろうとする本当の底力が無いことを証明しているようなもんでっせ。

○大分県に平松さんという知事がいて「一村一品運動」という旗をあげました。この「一村一品」という言葉は、平松さん（それを取り巻くブレンカもしれない）が創った言葉です。何ですかそれとは聞く前に、何か伝わってきます。「わしの村の一品は他にまけんぞ」と競争心をおこさせる不思議な力をもっています。また外から見れば、この一品一品を知ってみたい気にとらわれます。「一村一品」この一行の言葉の力が、運動のスピードに加速をつけ、都会人の心を魅きつけました。これが地方自身でものを考える底力です。「宇宙戦略兵器計画」というより「スターウォーズ計画」。「新宿都市計画」というより「新宿マイタウン構想」。同じ意味を表現しようとしてもこれだけイメージが違ってきます。莫大な金（ハード）を使わなくても、一行の言葉（ソフト）で人を魅きつけられるのです。その知恵が、ユーモアと機智にあふれていると思われこの土佐に残念ながら見当りません。高知では三年近く前から村おこし運動が始まりました。しかしその旗に書くタイトルも満足にありません。

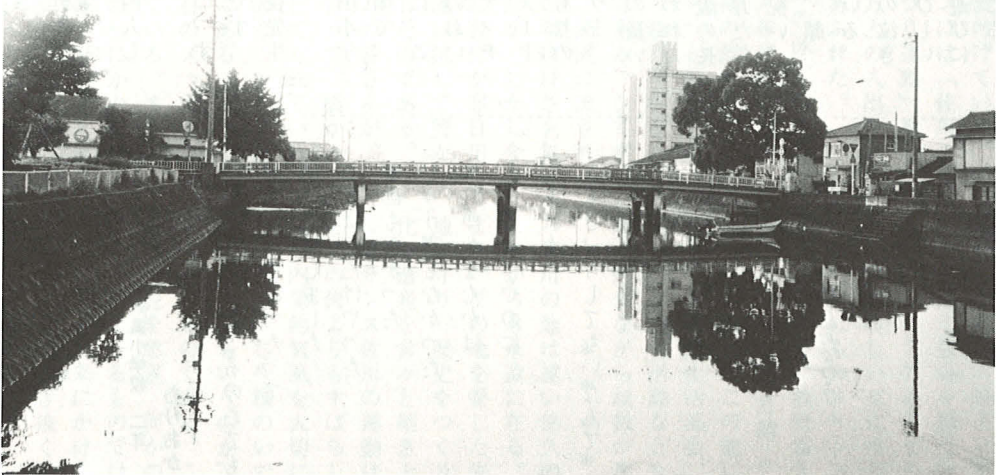
○はりまや橋は、我々高知の人間が高知のものの考え方で作ったはず。高知に帰って来た時は、気恥しい気持ちしがばらくしていましたが、車で行き来する暮しの中のはりまや橋は、その内何とも思わなくなりました。オソロシイ事です。「高知のガドレールは変わった形してるなあ」と県外のお客さんなら思うでしょう。次にこれがあのほんさんかんざしのはりまや橋だと気付いた時、私やつたら怒ります。「トサーノー、コーチノー……」たるばあロマンチックしておいて、赤いガドレールの裏切りです。一年に何百万もの人を裏切っているのですね、私たちは。帰っていった人たちのみやげ話は「高知のはりまや橋」に違いありません。それではそのみやげ話に、もうひと声おまけをつけてあげましょう。はりまや橋の橋のたもとに「糸のもつれとはりまや橋は、どこがはしやらわかりやせぬ」と立札（よく時代劇に出てくる、おたずね者の人相書きを貼ってあるあんな立札にさらさらと墨文字がよいでしょう）を立てておくのです。つまり、「たつたこれだけか」と怒りを買う前に「まっことすまん」と、あやまってしまふのです。これが、高知の人が創ってしまったあまり喜んでいただけにはりまや橋に対するケジメのつけ方

私の風景

一文橋

片岡 伸夫

昭和六一年七月撮影



橋から受ける印象は、周辺の状況によって異なります。流れる水に橋自身や土手、建物などが映っている風景が私は好きです。そこにもう一つの世界があらるように思えるからです。

私が最後の卒業生

和田 徳恵 (文)
写真



児童数一名。これ以降、入学予定の子どもはゼロ。廃校直前のその学校には、やさしい山本利博校長先生、ピチピチ美人の矢野雅子先生、親切な用務給食の西内千恵子さん、たった一人の六年生の西内恵子ちゃん、の四人しかいません。

恵子ちゃんは、キラキラ輝く瞳を持つ、すき通った声のちよっとはにかみ屋さんです。勉強も、給食も、掃除当番も一人、校長先生がぞうきんがけのお手伝い。

伊野町成山七色の里、私が初めて成山小学校を訪れたのは、昭和五八年の一〇月頃で、過疎の分校の記録を撮りつづけるうちに、この人たちと親しくなりました。給食のおいしいカレーライス、体育の時間のキャッチボールの球ひろい、裏山までの二キロメートルのマラソン―足腰には自信のあるつもりでもダウン。恵子ちゃんにはかなわんワ…。

三月二四日、雨。卒業式と七色の里の長い文化の歴史を閉じる閉校式が同時に行われた。親子三代この学校の卒業生という七八歳の長老や関係者、町の教育委員会や議会の方たちが参列。最後の卒業生の恵子ちゃんを祝い、別れの歌を、声高らかに歌う。その顔、顔、顔、成山小学校の思い出をかみしめている。

学校はこの里の文化の灯だ。赤ん坊の泣き声や子どもたちの笑い声のない里はさびしい。暮れの山道をのろのろ帰る私に、また遊びに来てくれと頼む老人の声が今も心にのこる。七色の里に、いつの日か子どもたちの元気な声が聞こえてくる日を念じて、仕事の合間を縫って、今日も写真を撮りつづけています。

白たきの学校

附属小学校 二年

もりおか よしこ

白たきというところのたてもものが
まえば学校だったって
びっくりしました

こくばんだけやった
ず画もなかった

しゅう字もなかった
木のゆかなんかは
まだきれいやのに
だあれも

べんきょうしてないなんて
ふしぎだった

かなしいな
せいとたちは
どうしたんだろう

先生も
どこへ行ったんだろう

どうしてだろう

プールの水も
うんどさむかった

やまもも親子詩の教室から

ルネサンス佐川について

渡邊 勉

人口一万六千人の中山間地の佐川町は、土佐二四万石の山城の城下町である。佐川深尾家は山内家の譜代として土佐に入国、慶長六年（一六〇一年）に佐川一万石を領し、藩の筆頭家老職にもついた。佐川の歴史や文化の多くが、深尾時代と深くかわっていることはいうまでもない。地の利、自然の風物、人物群とその往来を見るにつけ、いつの日からか歴史のまち、文教の地佐川と自負し続けるようになった。勿論、この自負は、あるいは佐川郡の田舎者のお国自慢程度のものかもしれないが、

佐川町のまちづくり、ひとづくりを「文教の地佐川ルネサンス運動」と呼んでいる。この運動を志した時期は昭和五七年であった。その前期の暮れから、町内の人権問題の解決をめざして小集落地区改良事業の実施を決め、基本構想づくりを京都大学名誉教授の西山卯三先生とその門下生の皆さんにお願いした。ただいた構想には、小集落地区改良事業を地域づくりと位置付け、地域づくりをさらに全町のまちづくりへと連

動さず考え方が提示されていた。昭和五九年には全町のまちづくり構想（町総合開発計画）として、佐川町ルネサンス・プランを、同門下生の金山隆一氏らによってまとめていた。こうして基本的な人権尊重のまち、豊かで希望にみちた文教の地佐川への船出が始まったのである。

乗台寺の沿革は南北朝時代といわれ、藩政時代は深尾家の菩提寺であった奥の土居の青源寺（一六〇三年創建）が権門の古刹とすれば、乗台寺は庶民の古刹である。この寺の山門横に知恵の文珠様が身を寄せている。今年ルネサンス運動の盛り上がりもあり、七千余りの人々が知恵を授かった。その庭にはまた、佐川八十八ヶ所の始点と終点の菩薩様が鎮座している。四国八十八ヶ所ならぬ佐川八十八ヶ所は、明治初期の廃仏棄釈に対し、隠れキリシタンにでもあやかっただであらう信者たちのレジスタンスが、密かに谷間や岩陰に一六キロに渡って隠れ菩薩を安置したことに始まる。

この一六キロを健康づくりと歴史を語る散策道としたのが、佐川ルネサンス・ロードである。赤い布を首に吊った菩薩様の前で老人会の方や若い学生が六根清浄をして一日遍路

の旅にでかける。幕末から明治にかけての歴史資料の宝庫といわれる青山文庫のある牧野公園を、ルネサンス・プランでは、ルネサンスの森と位置付けている。昨年からは、桜シーズンには「佐川ルネサンス・桜・酒まつり運動」を始めた。今年は何と七万人の人数があり、全山が花見客であふれた。

佐川町は、川に鯉の泳ぐまちな願っている。昭和五九年五月、私は神主と共に「鯉様の鯉心で川を澄まし給え、清め給え」と祈りをこめて稚魚を放流した。他力本願ならぬ鯉力本願という訳である。なまずや白鷺に飲まれたり、濁流に流されたりで、真面目に町の間抜けさを気遣ってくれる方もいたが、しかし今では、数百匹の緋鯉に真鯉が春日川を遊泳している。濁流に抗して鯉が春日川をアドレスにしたのである。夏の夕方、老人ホームの皆さんが、わざわざ食事を残し合って、橋から無数の鯉に餌付けをしてきている。川に鯉がゆうゆうと泳ぐ、ルネサンス佐川の新しい風物である。

佐川が地質学や化石のメッカであることは広く知られている。まちづくり委員会では、この秋にかの有名なナウマン象の命名者、ドイツ人地質学者ナウマン博士来町一〇〇年の記念行事を行う。というのは、旧深尾家屋敷跡のすぐ近くの山に格好のカルスト（約三町歩）があり、学術教育、文化、観光などの場として役立ててゆくために町で確保した。この佐川カルスト開きにナウマン博士に今一度ご登場を願うという訳である。カルストのあるまちもルネサンス佐川の新しい文化だと思おう。

この他にもルネサンスの名を冠した行事は多い。牧野富太郎顕彰事業や、ルネサンス月間（二月）、ルネサンス大学。この他にも、同教育部会、同産業生活部会、同文化部会、同自然部会の活動などを紹介したいが、残念ながら紙数が足りない。

佐川の地は遠い悠久の昔から在り、これからも永遠に在る。この地に生まれ、この地を愛した先達が、この地を守り、歴史をつくり、生活や文化の遺産を営々と築き上げてきた。ルネサンス佐川の運動は、それらがこの何よりもすばらしいと思う町民の内発的気風を大切に、可能な限りほんの少し今様のいでたち（現代的再生とでもいうのか）を加える役割を願うものである。この運動は、決して先を急ぎ、何かの完結を求めようとしているものではない。過去から現在、未来にかけて、この地に根ざす町民の生き抜くロマンを大切に

私の自然

(五)

山脇哲臣

(文) 野字
(写真) 写真

ある講演会の前に、世話役から「自然保護の話は今日は止めちよいとうせ」といわれた。かなり前、自然保護運動が盛んにいわれはじめた時のことである。考えてみればその通りである。どんな自然保護の話でも結論は、自然がなくなったら人間は生きていけないから自然を大切にしようというところになる。それは毎日食事を摂りましようという事に等しい。大事なことはとても大事な事だが、しょっちゅう話にして聞かされると、聞かされる方はうんざりする。私の講演にはどうしたのか御年輩の方が多い。気楽に息抜きに話を聞きにきたのに、堅苦しい話ではごめん蒙りたいのはよく解る。実はそれから私はまことに止む得ない場合を除いて、自然とか自然保護を口にしないことにきめていたのである。

ところがどうした風の吹きまわしか、その最も禁忌にしている自然を書けと書いてきたのである。始めは私もそんな事情があるので渋った。渋ったけれど稿料を出すからということにつらされて書く決心した。考えてもみて下さい。停年退職すると私の現金収入は原稿料より他はない。原稿料も昔一緒に飲んだこともあるから、宮尾登美子さんに準じて貰えるだろうと推測した。し

かしようして原稿料にこんな差が出来たのだからと思う。やっぱり詩を書かずに小説を書いたらよかった。詩の仲間には儲けられているの一人もいない。小説の方は字数が詩とちがって格段に多いから、そこが最後に稿料の差となつて出ているのだから。

そうしているうちにNHKが「私の自然」という題でやって下さいと来た。重なる時は重なるものだと感心してみたが、これも出演料がもらえらるというので、それは有難いと受諾した。話によると全国放送で、一泊二日で出来るだけ自然の美しい所でしようというのである。私はテレビと思った。早速散髪してネクタイは普段しないのに、それを付けて出ると、私ではないと思われ心配もあって、ざりてノーネクタイでは本当に持っていないと思われる心配もあり、取っておきの棒タイをつけて、香水の心配をする程の気くばりだったが、さて本番となると、来るべきはずの中継車もなし、肩かけの録音器のラジオだった。がっかりしたけれど、そう言うわけにもいかず「私の自然」、あれこれ理屈をしゃべったわけであった。「私の自然」とは変な題である。私の自然という特定する空間が存在するであろうか。あるとすればそれは私物である。私物の空間とす

ると、それは私の家の庭ということになる。私の家の庭が自然なのか。私の家の庭以外の広大な空間を自然とするならば、それが私の自然となると、他の人の自然はなくなってしまうのではないか。論理の展開はそういうことになる。それなのにNHKは「私の自然」についてしゃべれという。NHKには磯村、鈴木さんをはじめ錚々たる頭の人がいっぱいしゃべれというのだから、間違いに犯しているとは思われない。そのNHKが私に難題を吹きかけてくる。ここでまずい応対をする、後々おしゃべりの依頼がなくなる。なかなると私の現金収入の途がなくなる。現金収入の途がなくなるならどうするたためには、何かもっともらしい事をいなければならないのである。

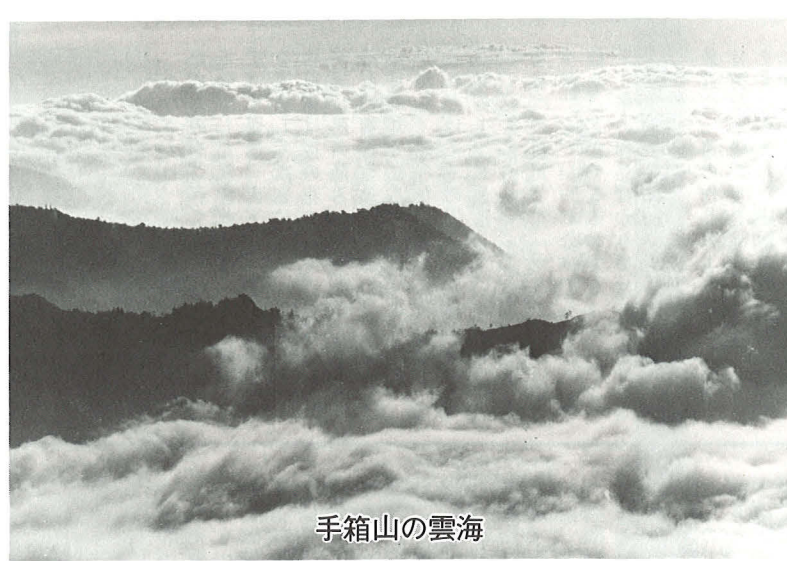
そこで私は次のような話をした。みんなが連れ立って、絵を描きに行くとする。西熊山の桜を写生に行くとする。そしてそれぞれ一所懸命描いて、出来上った絵をみてみると、恐らくは同じものは決まらないうら。絵は個人差が大いとして、写真にしてみよう。写真ほどではないにしても、やはり同じ写真は出来ないだろう。それは何故か……それは個人個人の認識の違いなのである。自然という対象物が、自分とは別に存在している。しかしその存在しているものは、各人の認識の違いで別々に表現される。だからそこに「私の自然」ということがいえることになる。つまり私は自然をこのように認識する。「私の認識した自然」と解釈すれば、「これは別に自然を私が占有して他人に迷惑をかけるものでもない。この認識を更につきつめて考えてみると、対象としての自然の存在は薄れて、認

識のみあるらしい。唯識という考えからすると西熊山の山桜はそこに西熊山の山桜があるのではなく、自分の心が二つに分かれ、一つは自分の見る心、一つは山桜の見られる心になつていて、自然を自分とは別の存在とする、ヨーロッパ流の考え方からすると、随分突飛な飛躍した考え方からすると、この唯識論は、印度では二千年も前から考えられていて、それを中国に持ってきたのは三蔵玄奘で、その経本を翻訳したのは慈恩大師で、日本へは薬師

寺の系統の法相宗が、この唯識に特に力を入れているという。

西熊谷に桜が咲き、桜が散っているのは、自分と無関係に花が咲き散りしているのではなく、その実、自分の心が花と咲き花と散っているのだから。そう思つて自然をみると、何だか唯識の考え方が正しいもののように思えてくる。より自然が美しいものとみえてくる。ひどく自然が傷められたところをみると、よりいたましいものと、身につまされる思いになる。自然と自分は、相対的なものとは考えられず、自然と自分とは一つのものではない。山川草木悉皆成仏というの満更嘘ではないようにも思われる。

武蔵野と同じ美しさと気がつく。くぬぎ林はなかつたが、こならの林があつて秋の紅葉は美しく、そして落葉だけには武蔵野に負けないくらい沢山あつた。いつしかその落葉を蹴散らしながら、雑木林の中を歩くことになり、心算に思いを抱くようになった。と一筋に単に自然の描写なら、独歩の武蔵野位の文章なら描けそうだと思つた。尾根筋の雑木林の小路、峠に近い高いところからは、早春になると遠く雪の山が輝いてみえた。白髪山や網附山の春の雪だつたけれど、それは私には遠くにあつて輝くもの、近寄り難い憧憬の具象化したものに映じた。今考えてみても、自然に対する想いも、そしてその表現能力も、私のそれは中学時代のそれから一歩も出ていないように思われるのである。



手箱山の雲海

私が自然といったものに開眼したのは、国木田独歩の「武蔵野」である。あの武蔵野の文章をみて、これは美しいものだと思つた。木枯しに舞うくぬぎの木の落葉の美しさを、このようにリアルに書ける文章があるものかと思つた。旧制中学校の二、三年生の頃である。でもその読んだ文章は、国語の読本に乗っていた武蔵野のごく一部の文章である。だから当然それは独歩がツルゲネーフの「あひびき」を読んだときのシベリヤのあの森の描写に触発された文章だとは知るよしもなかった。武蔵野を読んで感動した私は、しかし自分のふるさと香北町の山あい

環境庁が風景研究会を作るといふ。考えてみれば風景というものも自然同様、解つていようで掴み切れではないものである。そして風景は自然ではない。そして論理に合わないけれど国立公園や自然公園は、常識的に美しい風景のところにつくられる。人は美しいものをみると感動し、穢ものをみると顔をそむけるような本性をもっている。このところを道元は、花は愛惜に散り、草は棄嫌に生うるのみといっている。

この頃権の花が毎年よく咲く。北山へ春行くとき西熊谷ほどではないが、山桜が花盛りになつてくる。これは自然保護をしたため、花が咲いているのではない。エネルギー革命で薪炭林が伐採されなためである。日本の森林はアラブの石油のおかげで保護されている。森林の仕事がそれだけ減っている一面もあるのか。どのように考えるべきことなのか。

高知市近代年表 (一)

(注) △は月日が不詳

- 7・14 明治四年(一八七二) 廢藩置県令(三府三〇二県)
- 8・21 高知山城を廢し、郭中の士民雑居を許す
- 9・5 城内八幡宮を山田町に移す
- 9・5 兵務司廃止
- 10・3 宗門人別改め制度廢止
- 11・13 新置県令公布(三府七二県)
- 12月 林有造大参事に任ぜらる
- 12月 農工商雑業区別を定む
- 12月 人力車、高知に移入せらる
- 12月 明治五年(一八七二)
- 1・29 全国の戸籍調査実施(三十三百三十一万八百二十五人)
- 2・15 土地元代売買の禁を解く
- 7・1 高知本町に郵便役所設置
- 8・3 学制を頒(公)布
- 11・28 新築橋を架設
- 11月 徴兵令公布
- 11月 参事林有造に代り岩崎長武高知県権令に任ぜらる
- 12・3 太陽曆採用、十二月三日を明治六年(一八七三)
- 2月 土佐神社国幣中社に列せらる
- 3・14 浦上の預りキリシタンを還送
- 5・7 高知城を公園と定む
- 6月 小学校設立規則制定
- 7・28 地租改正公布
- 7・30 共立社「高知新聞」創刊
- 10・20 征韓論破れ、西郷、板垣等参議を辞す
- 11・10 内務省を設置
- 11月 海南義社結成
- 11月 此年山内豊範東京に海南私塾設立
- 11・7 藤並神社に初めて神橋を架設
- 11・14 明治七年(一八七四) 武市久万吉等、岩倉具視を赤坂喰違に要撃す
- 1・17 坂垣退助等民選議院設立建白書を提出す
- 2・7 陶治学舎設立
- 4・10 立志社創立
- 6・14 戸長以下会議章程を定む
- 8・29 此月選挙を置く
- 8月 学校名称を官・公・私の三種に区分す
- 8月 興基病院を廢し、高知病院を置く
- 11・7 地所名称を官、民有に区分
- 11・7 此年岩崎弥太郎水通町に製糸工場を経営す
- 1・8 明治八年(一八七五) 学齢を満六―四歳と定む
- 2・13 平民の称姓布告
- 2・22 板垣等大阪に愛国社を結成
- 3月 陸運高知会社を設立
- 4・13 通貨の呼称を円、錢、厘と定む
- 4・25 県下に大小区制実施
- 4月 帯屋町に中教院設立
- 5月 民会議事章程制定
- 6・28 識語律、新聞紙条例制定
- 10・25 陶治学舎を陶治学校と改称
- 12・13 高知裁判所設置せらる
- 2月 明治九年(一八七六) 海南私塾分校を高知に設く
- 3・12 日曜を全休、土曜を半休とする
- 5月 集議所(元戸長役場)を区務所と改称
- 8月 本町に日曜市を開く
- 8月 小池国武権令となり、阿波国高知県に編入せらる
- 11月 中新町に多賀教会所設置
- 11月 高知裁判所を高知地方裁判所とし、各地に区裁判所を置く

高知映画鑑賞会

吉川 修一

みなさんは、映画前線というものがあつたのを存じてでしょうか。東京で発生した映画前線は、その波紋を広げて西進、南下し、名古屋や大阪を通過して高知にもやってきました。桜前線は桜の花の咲くことで、梅雨前線は雨の降ることでもわかりますが、映画の前線が通過するのは、なかなか目や耳で知ることはできません。だから、知らないうちに私たちは、どれだけ多くの優れた映画がこの高知の上空を通過していくのを見逃しているかわかりません。「シテール島への船出」や「マルチニクは少年」を、いつになったら私たちは観ることができのでしょうか。マイナー系の作品ばかりではありません。メジャー系の作品でも、「ハンガー」「アゲネス」、ウッディ・アレンの最近の一連の作品のように、高知では何故か陽の目を見ない作品があります。そうした映画の前線に触れ、あるいは過ぎ去った前線を呼び返そうとする行為が、自主上映だと言えなくもありません。

高知映画鑑賞会では、ただ与えられた映画を受身で享受するだけではなく、「より良い映画状況を自分たちの手で作り出す」ことを基本理念に、二カ月に一度県民文化ホールや名画座で上映活動を行っています。しかし、まだまだ組織化の未発達な団体であり、経済的な制約もあつてその活動は十分なものとは言えません。わずかに、これまで上映した作

土佐民話の会

市原麟一郎



民話は私たちがの先祖が残してくれた、貴重な文化遺産である。しかし、口承の文芸であるがために、そのまま放置しておく、永遠の闇に消滅する運命にある。そこでこの郷土の貴重な宝の一つでも記録して、後世へ伝承してゆこうと考え、昭和四十六年に「土佐民話の会」を創設した。これには県下各地の会員が、それぞれの土地の民話(昔話、伝説、世間話)を採話して、私の方へ寄稿して下さる。それを編集して月刊「土佐の民話」に発表している。この八月で一七六号を数えた。

一号におよそ二〇話ぐらい掲載されるので、今までに三五〇話ほど記録され、後世へ伝承することが出来たと思っている。会員はいま県内外に六〇〇名である。



この土佐民話の会に「紙芝居サークル」が生まれたのが、一昨年のことである。民話は採集と記録と同時に、次の世代の子どもたちへの語りつぎという事も忘れてはならない。私は五七年秋から、民話紙芝

手話サークルゆびの会

平岡 美子

福祉ボランティアという、何か特殊で難しいことと考えている人も多いのですが、例えば盲人の手を引いて病院に行つてあげたり、朗読の奉仕をしたり、誰でも簡単に障害者の目や耳の代りを務めることが出来ます。この点日本は、福祉という点に理解が低く、まだまだ欧米各国に比べて対応が遅れが目立ちます。社会的にハンディを持つていることをもつと身近かに考える習慣がほしいと思います。行政も、簡単な福祉ボランティアの実践のための啓発運動や、予算処置などを積極的に取り組んでいただきたいものです。

ゆびの会はボランティアの手話サークルで、昭和五十一年に結成されましたので、今年で一〇年になります。その間には国際障害者年があり、手話のブームの時期もありました。現在の会員は約三〇名です。入会者は、県の手話奉仕員養成講座の卒業生が多いのですが、直接飛び込んでくる方もいます。

手話は聴覚障害者の生活の中から生まれた視覚言語で、日常の身ぶり手ぶりを思い出せば、決して難しいものではありません。ゆびの会の活動の主な内容は、各種行事、福祉事業への参加、よさこい祭りへの参加、人形劇団の招聘、全国大会に参加する中で手話を通じて、聴覚障害者と交流を深めていく事です。ゆびの会では、毎週月曜には定例

学校通信紹介

凡例：①誌名(六月現在の号数) ②大きさ(ページ数) ③発行部数(発行間隔) ④配布先 ⑤創刊年月日 ⑥内容・特色

- 青柳中学校
 - ①あおやぎ(およそ八〇〇号)
 - ②B四判(一ページ)
 - ③約六〇〇部(週二・三回)
 - ④全校生徒、保護者
 - ⑤不明
 - ⑥学校行事、学習、生活、体育などすべての分野にわたつて掲載し、また保護者からの返信を集約している。
- 愛宕中学校
 - ①愛宕だより(本年度二号)
 - ②B四判(一ページ)
 - ③一三五〇部(不定期)
 - ④生徒、家庭、教職員
 - ⑤PTA家庭内、学校行事、校内外のようす、家庭教育、お知らせ、保護者だより、各種成績、生徒作文他
 - 一宮中学校
 - ①学校だより(本年度第三号)
 - ②B四判(一ページ)
 - ③九七八部(月二回)
 - ④保護者全員
 - ⑤昭和六一年(現在の名称で)
 - ⑥学校教育のねらいや活動内容、諸行事の紹介。学校と家庭のパイプ役。
- 介良中学校
 - ①学校だより/学年だより/学級だより
 - ②B四判(一ページ)
 - ③全校生徒数(毎週)
 - ④PTA
 - ⑤たよりの種類によって異なる
 - ⑥学校内外の出来事、生徒の感想文、保護者の返信等
- 城東中学校
 - ①学年便り(一年一四号、二年三八号、三年六号)
 - ②B五判(一ページ)
 - ③生徒数(毎日/毎週)
 - ④全校生徒、教職員
 - ⑤不明
 - ⑥各学年向きに進路、学校生活、学業指導、保護者からの返信等を掲載し、学校と家庭の連携を密にする。

品の水準の高さに、少しばかりの自負を持つだけだ。結局、映画の上映団体である以上、その活動の真価は、毎回の上映作品の質と観賞条件の良さ、上映活動の息の長さで問うていくべきなのだろう。

日本人の芸

フランス人の男性と結婚したお嬢さんがいた。東京でしばらく暮らした後、夫の仕事上フランスに帰つてスイスの国境近くの小さな町に住んだ。夫は観光関係の仕事に携り、彼女は家庭夫人の位置を守つて暮らしていた。子供は男児二人、女児一人を儲けた。ところが下の男児に二歳になった頃、夫君がガンに冒され、ほぼ一年ほどしてあつた死んでしまった。フランス国では、生活維持者の夫が死んだ場合、妻に後見人ないし保証者がいない場合は、いやおうなく子供を母の手から取上げ、すべて子供の面倒を国が見ることになるそうである。そこで、急遽日本人妻は故国で家を継いでいる弟を呼寄せ、保証者として役所に届出てこ

居と昔語りをもつて、市内の保育園、幼稚園、小学校の巡回公演を行つていた。だが一人では公演にも限度があるので、数人の方から参加の申し出があり、サークルの誕生となった。最近市内のみならず郡部へも巡回公演を行つている。

風伯

となきを得たそう。彼女は練達のフランス語を生かしてその町の役所に務めることになった。やがて夫の四十九日がきて(フランスにも四十九日の忌に類する慣習があるそう)、彼女は又もや故国の妹を呼寄せた。その妹は独身で、大阪の辻料理学校の卒業生であつた。姉の家の四十九日に馳参ると、その日の料理はすぐ隣国のスイスのジュネーブで一切調うそう、妹はフランス人の親、親戚の前にその日、中華料理のフルコースをやつてのけたそうである。御承知のように、フランス人は料理人を芸術家として扱う。当時、これがその町の界限で大評判になつたという。つい去年の暮れの話である。(由外)

地方

「地方」ということばには、二様の読み方がある。周知のように「じかた」と「ちほう」の二つである。「じかた」というのは町方に對する農村世界を示すもので、古い由緒をもっている。

間隔をおいて追隨するものだとということを含みとして。ここに地方と中央は、地理的距離の問題としてだけでなく、「先進主導」と「後続追隨」の格差の問題として意識されるようになる。

- ①なめがわ(二五〇号)
 - ②B四判(一ページ)
 - ③七〇部(毎月)
 - ④保護者
 - ⑤不明
 - ⑥一カ月の予定や連絡事項
- 「地方の時代」がいわれだしてしばらくになるが、単に言葉の問題としてでなく、いまこそ地方が誇りをもちた主体性、アイデンティティを確立すべきときである。(亜)

